『百科全書』前史におけるジェームズ『医学総合事典』

逸見龍生

「この二人の著述家は、『百科全書的辞典』を計画したところだった。それははじめ、ディドロが訳を仕上げたジェームズの『医学事典』とほぼ似ている、チェンバーズの翻訳のようなものとなるはずであった。」

（ジャン＝ジャック・ルソー『告白』）

一、事典仏訳の沿革

ジェームズ『医学総合事典』[1]は、英国人医師ロバート・ジェームズ[2]（一七〇五―一七七六）により一七四三年初頭[3]にフォリオ版三巻本中第一巻、続く二巻が四五年一月[4]にロンドンで刊行された後、一七四五年末（仏訳版も第一巻表紙には四六年とあるが前年秋）から四八年にかけて、パリのブリアソン、ダヴィッド、デュランの三書店によって仏訳が刊行された。仏訳はフォリオ版で六巻を数え、英語原著よりもほぼ倍増している。仏訳書名は『医学、外科学、化学、植物学、解剖学、薬学、博物学等の総合事典』であった。古今の同分野の記述が幅広く集められ、専門事典としてもその対象はきわめて広汎にわたっていた。

理念的にも実質的にも『百科全書』のプロトタイプをなす英国のチェンバーズ『サイクロピーディア』や、同時代フランス最大の総合辞典であった『トレヴー辞典』のように、『百科全書』全体と関わりをもつ総合的な

普遍辞典の系列とは質的に異なり、個別的な学問領域に特化した専門事典である限りにおいて、ジェームズ『医学総合事典』の『百科全書』との関わりは部分的なものに留まるように見える。[5]しかしながら、ジェームズの事典は、例えばショメル『家政事典』（一七〇九年）、サヴァリ『商業事典』（一七二三―三〇）など、『百科全書』と関連の深い同時代の多くの専門事典[6]に比べても、格段の重要性を持っている。

特筆すべきなのは、この事典の成立に『百科全書』参画前のディドロ自身が直接携わっている点である。医学者ジュリヤン・ビュソン（一七一七―一七八一）を監修者として、エドゥ（一七一〇―一七八〇?、あるいは一七九〇?）、トゥーサン（一七一五―一七七二）とともに、ディドロは刊行が準備された最初の段階である一七四四年頃から、同書の共訳翻訳者として仏訳成立に参加している。そもそも、辞書編纂事業としてジェームズ『医学総合事典』と『百科全書』は互いにきわめて近い密接な関係にあったから、これは単なる偶然ではない。ブリアソン以下、同事典の版元の三人の書籍商は、いずれも一七四五年十月十八日、ル・ブルトンとともに出版連合をなし、ル・ブルトンが単独で企てたもののいったん頓挫していた『百科全書』事業継続に携わった。ディドロはその数ヶ月後の一七四六年初頭には、『百科全書』事業に翻訳者として加わったことが書店側の記録に残る。[7]すなわち、最初期の『百科全書』刊行構想は、この『医学総合事典』仏訳刊行事業とほぼ同じ事業者、同じ翻訳者によって、並行して進んでいたことになる。ディドロはすでに一七四三年、ブリアソンのもとで彼にとって初の翻訳書となる『ギリシア史』を出版していた。ジェームズ医学事典は、この三十歳になりたての無名の著述家にとって、同じ版元による、歴史書に続く英語著作の翻訳企画であった。[8]

『医学総合事典』は、原著初巻が刊行されてそのわずか一年後の、一七四四年五月八日にブリアソンが同書仏訳の出版允許を獲得。四四年末、あるいは少なくとも四五年二月までには、仏訳版の予約講読登録者向け趣意書が頒布された。この趣意書の一部を写したジュルナル・デ・サヴァン誌四五年三月号に掲載された書評によ

れば、[9]翻訳作業および編集の骨子は、四四年の夏から半年ほどでかなり進んだものと思われる。その後四五年末に第一巻刊行、四六年五月に第二巻を公刊後、順調なペースで刊行が続き、四七年一月に第三巻、同年六月ないし七月に第四巻が刊行、四八年一月に第五巻とおよそ半年に一巻のペースで進捗し、四八年中頃には最終巻第六巻が出て、刊行が終了した。

この刊行の作業にディドロが加わっていた正確な期間、ならびに彼がどのような形で、どの程度関わったかを明確にしうる史料は少なく、記録に残っているディドロの参加の様態を示す諸々の記述は互いに矛盾しているようにみえる。例えばルツ編纂によるディドロ書簡校訂版には、ディドロ自身の証言で、『盲人書簡』出版によりヴァンセンヌ投獄中に書かれた釈放嘆願文書に「ジェームズ医学事典のために三年ほど働いた」とする記録が見つかる。[10]ヴェントゥーリが[11]指摘するように、この言が正しいとすれば、四四年夏か秋頃から事典の翻訳を始めたディドロが三年ほどでやめたとして、ディドロは四七年秋に『百科全書』編集主幹職に就くのと相前後して医学事典の仕事を放棄した可能性が高くなる。ディドロのチェンバーズ『百科全書』翻訳事業参加をもっと早い時期と捉える説[12]もあるものの、同事業の出資主体であったル・ブルトンが『医学総合事典』合同出版社三社と提携をした後の四六年六月には参加は行われているから、少なくとも一年間以上ディドロは双方の辞書の翻訳を並行して進めていたことになる。他方で、書簡校訂版には、『不謹慎な宝石』刊行直後の四八年一月と二月に書かれた、警察の密偵をしていたボニという名の書店商による警視総監へのディドロの告発文書が二通載録されている。[13]『医学総合事典』第五巻刊行時期にあたる二通目の文書には、ディドロが刊行途中の医学事典の編纂者の任にあるため、この小説のために投獄されて事典の刊行が中止になる事態を、書店側が何をおいても恐れている旨が記してある。[14]この証言を信用するならば、ディドロは『百科全書』編集主幹となった後も、少なくともしばらくはジェームズ仏訳の仕事を継続しており、しかも、単に一翻訳スタッフであったというよ

りもむしろ、『百科全書』と同様にこの辞書においてもなお実質的な編集統括責任者であったことになるだろう。

どちらの証言を取るにせよ、いずれにしても一年ないしそれ以上の間、ディドロが『百科全書』初期企画と並行してジェームズ『医学総合事典』の翻訳、ないし翻訳と編纂作業の双方を進めていた可能性は高い。

同事典の刊行についてやや詳しく触れたのは、『百科全書』構想の揺籃期から準備期という時期にそれが重なることに注意を払いたいからである。第一巻刊行に至る前のこの時期に、『百科全書』構想がどのような転変と変容を辿ったかは、比較的知られている。[15] そもそも英国人ミルズとドイツ出身の翻訳者ゼリウスによる提案によって、ル・ブルトン書店がエフライム・チェンバーズ『サイクロピーディア』の仏訳企画として構想したのは四五年二月であった。同月二月二六日に最初の出版允許がル・ブルトン書店に与えられ、早くも翌三月には、予約購読者向けの最初の趣意書が頒布される（ディドロが執筆した五〇年の趣意書と区別して「第一趣意書」と呼称しておく）。この「第一趣意書」[16]は同書を『百科全書』あるいは『エフライム・チェンバーズの英語から翻訳された技芸と学問の総合辞書』と命名している。出資者であるミルズらとのいざこざがあってそれが八月にいったん取り消され、四五年十月十八日に、ブリアソン以下先述の三書店が加わって新規に共同出版計画構想が作られる。同年同月の四書店の討議記録に残る書名は『サイクロピーディア』、『チェンバーズとハリスの英語辞書から翻訳された、諸学問と技芸の総合辞書』という名が記され、チェンバーズに加えてジョン・ハリスの辞書『レキシコン・テクニクム』が翻訳計画に追加して組み込まれる。[17] 翌年四六年一月、允許が更新される。ジェームズ仏訳第一巻発刊直後である。『医学総合事典』第二巻刊行の一ヶ月後、四六年六月には合同書店によってグア・ド・マルヴが編集主幹に任命され、その下でディドロとダランベールによってチェンバーズの翻訳が行われていることが書店側の給与支払記録に残る。この契約締結直後の書店側の記録には、トレヴー辞

典を筆頭に大量の同時代の辞書や資料が編集主幹ド・マルヴに貸与される旨の文書も見つかる。『百科全書』編纂に必要と認められたからであろう。[18] ド・マルヴはしかし就任からわずか一年後の四七年夏、『医学総合事典』第四巻刊行直後にあたる時期に、編集主幹の職を辞せられ、同年秋の十月、ついにディドロがダランベールとともに編集責任を任せられる。

『百科全書』編集計画がチェンバーズ仏訳からその増補版へと構想の拡大を経て、現行のそれのように単なる翻訳を超えたパリ版独自の『百科全書』として三度目に大きく変更される時期は、ディドロが編集責任を担った四七年夏頃とする説から、四九年のディドロのヴァンセンヌ投獄直前という説まで諸説ある。[19] ただ、四八年夏の第二允許取得記録にはまだ「翻訳」という文言もあり、[20] 合同書籍商の一人ブリアソンも改革派牧師で『百科全書』寄稿者の亡命ユグノー、ベルリン・アカデミー哲学部門の書記であったサミュエル・フォルメ宛四八年九月八日付書簡に「チェンバーズ辞典」と呼び続けていたことが記録に残っていることから、[21] チェンバーズ『サイクロピーディア』仏訳計画として始まり、多くの同時代の代表的な辞書を集めてその規模が拡大していく『百科全書』の一連の増補翻訳版作成作業が、たとえ徐々にパリ版独自の項目が新規に加えられ、しだいに重心がパリ版独自の寄稿項目に置かれるようになりながらも、少なくともこの四八年晩夏の時期までの四年近く、すなわちジェームズ『医学総合事典』全六巻刊行終了近くに至るまで、一貫して翻訳としての当初のかたちを基盤として継続していたということはできよう。『百科全書』刊行史が語られるとき、これら二つの辞書刊行の流れが相関的に顧みられることは少ないが、しかし本稿においてこの点は重視しておかねばならない。

二　競合する二つのDictionnaires

一七四五年三月に刊行されたジュルナル・デ・サヴァン誌を通覧するとさらに明瞭になるのは、両辞書刊行のこの並行性のみならず、むしろ当初にあった両者の事業的な競合関係と呼ぶべき事態であろう。一七四五年三月、ジェームズ医学総合事典仏訳全六巻の刊行計画は「しばらく前に公にされた」が、予約購読者用出版計画書を書店側が頒布することとした云々との紹介の後、この計画書の一部が好意的なコメントともに引用され、第一巻の同年末の刊行予定が読者に告知される。[22] 同月号の末尾にあるヨーロッパ各地の書籍刊行ニュース欄には、パリのル・ブルトン書店が同じく予約購読者のために『サイクロピーディア』趣意書を初めてこの月に頒布したとの通信記事が載り、趣意書の内容がやはり好意的に紹介される。[23] 第一巻刊行予定とされたのは、医学総合事典に遅れること半年の一七四六年六月であった。したがって、わずかの間にほぼ相前後して、英国の二つの巨大な辞書が仏訳される大事業が発表されたことになる。全巻予約購読料はジェームズ事典が一〇〇リーブル、チェンバーズ仏訳『百科全書』が一三〇リーブルであった。

ジェームズ『医学総合事典』趣意書に遅れて頒布された『百科全書』「第一趣意書」は、次のような文章で始まる。やや長いが引用してみよう。「我々が保有する辞書の数量の多さ、そして公衆が辞書に対して示す評価の高さほど、辞書の有用性を示すものはない。ある辞書は、なにかしらの技芸、なにかしらの学問を個別に扱うことで満足してきた。別の辞書は、それが包括する構想においては、なるほどより広くはあるものの、普遍学の諸分野については、ほとんど触れようともしないのであった。だが、きわめて大きな広がりを包括し、これを深く扱う著作、諸技芸と諸学一般に関わる万物を蒐集し、これを整理しうる著作、それら学芸の各部分を世に知らせ、その一つ一つを完成することを目指す著作が、我々には欠けていたのであった。チェンバース氏

の『百科全書』こそ、まさしくそうした著作である。〔中略〕しかしながら、たとえこの著作がその生国でいかに知られ、広まっていたにせよ、ヨーロッパの他の地域、特にフランスにおいて、決して多くの人の知るところではなかった。人はそれをうわさで知り、他者を信用して評価することに甘んじていた。類似の分野に関し我々は様々な著述をすでに所有している。そのことが、とっくに誰かが述べたことを寄せ集めたとしてしか自分には思われぬ書物についての、深い知識を持つことをないがしろにさせても来た。かような書物の著者が、我々の研究よりもさらに先へ研究をおし進めたかどうか、著者がそれらの研究をどのように扱ったのか、その方法もしっかり知ることもなく、我々は今まで、こうした著作を取り入れるべきかどうかという問題に、きわめて無関心なままであった。」

「この本の真の表題は『百科全書』、すなわち『あらゆる学問相互関係と連関』である。『諸技芸と諸学問の総合辞書〔＝普遍事典〕』の副題が添えられているが、それはまさしく著者が著作を作る上で用いた方法である。その名前だけで称賛に値し、文芸の進歩のためにいくつもの計画と構想を残した学者ライプニッツ氏は、このような著書がそれに値するような仕方で実現されることを望んでいた。また彼がアルステディウスの百科全書を評価していたとはいえ、彼の評価は実際の出版物よりもその作品の構想のほうに大きく関わっていた。ライプニッツは、大いなる勇気と能力を持ってこの企画を完成へと導くことのできる学者が現れることを望んでいた。」

「この仕事はあまりにも広大なので、不安と気後れを感じるのは当然であるし、人間一人の手には余るものと思われたが、チェンバース氏はあえてそれに着手した。彼は十分な能力と勇気によって立ちはだかるすべての難題を乗り越えることができた。彼は多くの学識をもとにあらゆる題材を討議した。あらゆる専門家たちを感動させる明解さと明晰さを組み込むのも忘れはしなかった。彼は諸技芸と諸学問の管轄にあることをくまな

く取り扱うので、医学や解剖学ほど必要な諸々の知識についてもれのないよう細心の注意をはらったことがうかがえる。彼がこれらの知識について完全に知っていたことは否定できないだろう。またイギリス人医師ジェームズ氏は、出版したばかりの医学事典において、チェンバース氏の辞書に敬意を表し彼がそこから引き出した有用性を語っている。我々がここでチェンバース氏の諸技芸と諸学問の普遍事典について示す例証は、その普遍性が医学という学問、その実践、それと関連する他の部分が狭い範囲しか含んでいないジェームズ氏の事典と比べ我々が提供する辞書がいかに差異があるかを十分に知らせることだろう。[24]」

趣意書の冒頭から明確に強調されているのは、かりに個別の内容の充実は高くとも、専門的学芸辞書であるがゆえの他の辞書の狭さと限界であり、ライプニッツが普遍知の真の総合として夢想した辞書の実現であるチェンバーズによる百科全書『サイクロピーディア・諸学問と技芸の総合辞書』の優越性であった。この専門的学芸辞書の事例として唯一本趣意書に挙げられたのが、まさしく『医学総合事典』であったことは注目に値する。両者ともに英国出自でありかつ酷似したタイトルをもつ「総合辞書／事典 dictionnaire universel」と銘打ってパリの書籍市場に相前後して登場した以上、後続企画である『サイクロピーディア』仏訳版『諸学問と技芸の総合辞書』が、ことさらその照準を、質的にも量的にも自己と拮抗するジェームズ仏訳に定めたのは、むしろ当然であったろう。この市場における競合相手に対してチェンバーズ仏訳版の主張する「差異」、それこそは『サイクロピーディア』が文字どおり諸学の垣根を取り払った知の普遍性を志向する辞書であるという点にあったが、しかしそれと同時に、「医学や解剖学ほど必要な諸々の知識」といった個別性においてもジェームズの事典を凌駕しているという、専門辞書の専門性による優越という読者からの当然に想定される反論への、修辞学でいうところの予弁法が、いささか強弁にも近く用いられもしていた。それは「イギリス人医師ジェームズ氏は、出版したばかりの医学事典において、チェンバース氏の辞書に敬意を表し彼がそこから引き出した有

用性を語っている」との記述、すなわちチェンバーズを少なくとも一部を典拠としてジェームズの事典が編まれたという、かなり踏み込んだ言い方までにおよんでいよう。しかし実際には、ジェームズ『医学総合事典』ロンドン版「序言」には同種の表現はおろか、チェンバーズへの言及そのものがそもそも見当たらないし、ロンドン版同事典第一巻調査の結果のみについて言えば、本文中にチェンバーズからの引用が明示された三項目の例では、ジェームズが行っているのはいずれもチェンバーズの記述の誤謬の指摘である。[25] 総じてジェームズは、チェンバーズの辞書には見当たらない医学・解剖学をはじめとする様々な関連諸項目を、広汎に事典のうちに蒐めるのに成功していて、先の第一趣意書の表現は適切とは言いがたい。要するに二つはあくまで別個の辞書であった。

三　ヒポクラテス主義の導入

そもそもジェームズ事典ロンドン版とはどのようなものであったろうか。その原題は端的に『医学事典』であり、副題に『医学に関する物理学、外科学、解剖学、化学、植物学の全領域を含む』ならびに『薬品の記述、すなわちその多様な製法、結合および用法についての説明を付す』[26] とあった。その特徴をまとめれば、以下のようになろう。医学とその隣接領域について、ヒポクラテスやガレノスを始めとする古代の医家、ならびにハーヴィ、シデナム、ウィリス、ホフマン、シュタール、ブールハーフェらに至る近代の医学者の著作を広く渉猟して、諸々の医術用語や関連概念、生理現象の体系的な定義を提示すること。これら著作に加え、王立協会やパリ科学アカデミーなど同時代の学会報告や論文から実際の症例、顕微鏡など当時の最新の実験道具を用いた解剖や外科手術の観察記録を数多く集め、身体疾患の詳細な分類と周到な記述を行うこと。狭義の医学に

はとどまらず、パラケルスス、ファン・ヘルモントらいわゆる医化学者や、プリニウス、テオフラストス、ディオスコリデス、ピソ、レムリ、トゥルヌフォール、レイなどといった古今の博物学者、薬草・薬物学者など多様な諸学者の著作も同様に渉猟し、薬の材料となる世界各地の鉱物質や動植物の様態とその用途に関する記述を広く集めること。本文には、古代医書から馬の疾病とその治癒の経過報告なども採録されたり、また実際的な経験主義の観点から、錬金術の成果についてもこれを無視することなく取り入れられており、仏訳版「編者緒言」[27]にも謳われているように、この事典は、きわめて多様な「生命の維持と健康の恢復」をめぐる古今の実用的な知を一般の公衆に向けて提示することによって、「家庭の医学を改革する」[28]ことが目的であった。

ロジェがすでに指摘しているように[29]、ジェームズの原典が、プロテスタンティズム的なキリスト教信仰の枠組みを大枠において堅固に維持していたことも注目されてよい。方々に隠された聖書への言及や、カトリシズムへの直接的な批判はそれを端的に告げている[30]。だがジェームズが本事典で鮮明にする立場は同時に、英国科学思想の一つの新潮流とも呼応していた。それが最も明確にされるのは「序言」においてである[31]。原著で九八ページを占める長大なその本文は、医術の古代の起源から現代に至る歴史と発展を詳細に物語っている。冒頭には神の摂理の概念が取り上げられ、均衡を逸した身体の異常を調整する生体の「自然的本能」――ジェームズはこれを動物にも人間にも共通する「神感 inspiration」と呼び、変調を期した生体機構を治癒へと導く一連の反応の動因とみなす――がいかに摂理に由来し、「創造主の賢しき教え」に適うようわれわれの身体の次元で自在に働いているかが示される[32]。摂理の働きは、おのれの理性を過信して自然の矩を外れがちな人間よりも、本能の赴くがままに適切な食餌を摂り、自然に動作する獣においてむしろ遙かに明示的である。同じ論理は、歴史に位相を移して、古代人による様々な薬や治療法、養生法など医術の「偶然」の発見を説明し、これを必然化するときにも適用されるだろう。身体に不調を来した場合、「野蛮人や狂人」あるいは「文盲」こそが、

「自分の行為にいかなる合理的根拠も与えない」ながらも「秘やかな衝動」に従って正しい療法を見いだす。理性の役割は、これまで無数に伝承されたこれらの療法を踏まえ、様々な症状の「観察」や、治癒に関する多大な「実験の反復」、そして他者との相互的な「教育」の場を通じ、「神感」が見いだした個別的な事象を具体的な「医術の改良」へと結びつけることにほかならない、と著者は言う。[33]

このような論理は、医学史的文脈にあっては、当然ながらヒポクラテスの名高い「自然」概念が切り拓いた人体の「自然治癒力」（vis medicatrix naturae）の概念と、十七世紀のシデナムによるその再評価が興した英国医学の経験主義伝統に直接発していよう。この「序言」は、医術史におけるヒポクラテスの功績を決定的なものと評価し、全体のおよそ三分の一をその学理の説明に割り当てている。[34] そこでジェームズは、ヒポクラテスの学説の枢要として、内的な均衡の回復をおこなう身体深部の「力（デュナミス）」――この「力」は、「一方では、種にとって善なるものあるいは適合したものを引き寄せ、これを保持し、備え、あるいは変容させるものであり、他方では、不要なもの、損害を与えるものを、有益なものと分離させた後で、除去するもの」と定義される――というかの古代医学の概念の重要性を主張し、[35] 生体という「動物経済」[36]を、自己保存を目的として調整的に相互機能する自律的なホメオスタシスの機構として提示する。「ヒポクラテスが自然という語で意味していたもの」（強調原著者）とは、「身体の諸部分が、それらが悪のうちに苦しんでいる時にはそれを通じて相互に共感し、なにがしかの善が生じればそれを通じてこの善を分有しあう、身体の諸部分のあいだにある親和力のことである。偉大なる箴言の通りに、身体のあらゆる部分は、動物経済に適うようにして協働し、交感し、協力しあうのだ」。[37] 本能や力、そして自然という語彙で示される生物の本性の深部に、意識以前のミクロな合目性と社会結合性の発現の契機をみようとするこのようなヒポクラテス主義的観点の顕揚は、あくまでも受動的な物質の構成する機械として身体を捉えるその当時なお支配的であった粒子論的物質観に立つ近代機械論医学とは少

なくとも異質の、更にいえば矛盾し、拮抗する地平の可能性を招きうるものであろう。[38] ここには十八世紀後半のモンペリエ医学派たちの生気論との近さも指摘しうる。[39]

だが、こう言ったからといって、事典全体に示された内容の革新性を過度に強調することはできない。例えば、ジェームズの医学事典には、物質自体に活性を与えるような諸概念――生物学的モナドや有機的分子、生命繊維等々[40]――は未だいっさい導入されてはいない。スイスのトランブレーが、切断した淡水ヒドラの断片から完全な身体組織が再生されるのを観察したのは、事典第一巻刊行の一年後の一七四四年である。顕微鏡による微生物の自然発生がイングランドのニーダムによって「発見」（後に誤りと判明）され、前成説と後成説をめぐる生物をめぐる伝統的な形而上学的問題が、ヨーロッパ各地の科学アカデミーを拠点として再燃したのは一七四五年である。これら物質に内在する活力の問題が、科学の最前線で実証的に問われ始めようとする真際に、この事典は刊行された。その限りにおいて、ジェームズのヒポクラテス主義の大部分は、実際にはあくまでも、ホフマンやシュタール、ブールハーヴェらといった、前世紀後半から世紀初頭にかけて先人たちのおこなった医学的認識の変革の成果から、文献を通じて彼なりに学び取ったものを選り出したものにほかならなかった。そもそも、先に引用したヒポクラテスの「自然」概念のくだりそのものが、スイスの医師ダニエル・ルクレールによる、人口に膾炙した『医学史』（一六九六）の一節からの写しであった。[41] ジェームズが提示し、『ヨーロッパ学術著作理論文庫』等に見られるように、同時代がとりわけこの事典において好意的に受容したのはむしろ、次節で取り上げるように古代から近代に至る数多くの医学典籍を編纂するのに遺憾なく発揮した、その学識のほうであった。[42] 同事典が、ときに新旧の雑多な知識の無定見な堆積といった観を呈しているのは、理論的体系の専制を斥けるシデナム以来の英国医学の経験主義的な姿勢に由来するのみならず、こうした学問の過渡期に特有の時代的制約のためでもあろう。

しかし同時に、以上に見たようなジェームズの事典が、ポープの『人間論』（一七三三―三四年、散文に編み直したド・シルエットによる仏訳は三六年）やハチソン、シャフツベリなどの影響を通じて一七三〇―四〇年代に英国から大陸へと流入した、道具的理性に対する人間の自然本性の原初的な本能や感覚、情念の顕揚、そして道徳感覚論における倫理的次元と感性的次元の架橋といった、道徳論における決定的な重点の移動の時期と交差して刊行されたことに注目すべきであろう。ディドロが娘に遺した文庫の中には、彼自身の直筆でびっしりと注釈の書き込まれた『人間論』仏訳版の初版が見つかる。初版刊行直後から第二版の出る四九年までの二〇代から三〇代にかけて、持続的に手に取られ、再読されたと推定されるこの書物[43]には、随所に引かれた下線、そして行間や欄外の余白の至る所に誤訳の指摘やディドロ自身の試訳（ディドロはポープの英語原文も所持していたらしく、これとド・シルエットの仏訳を詳細に比較照合してもいた）、本文の要約、解説、感想等があり、いかにこの書がディドロにとって、たんに愛読書という以上の重要な意味を持っていたかがわかる。彼は、ジェームズの先の「序言」を読み、次のようなポープの文章を思い起こさずにはいられなかったろう。「本能において統治するのは神であり、理性においては人間である」[44]。「本能と理性の間を区切る境界はきわめてわずかである。二つは永遠に分離されていながら、永遠に接近しているのだ」[45]。「決して道に迷うことのない本能に導かれた獣は、他の無謬の能力を必要としようか」[46]。

本能や情念はその本性上善であって、その背後には神の摂理が直截に見いだされるのであり、本能的な傾向性に導かれた情念の非主体的で純粋な力の場こそ――そこでは存在の階梯の理論に従って人間と動物の境界は限りなく曖昧にされる――が、個の自己保存と全体の調和という、ホッブズ以来切断された二つの次元の接続を論理的に可能とする。このようなポープの議論の結構に見られる反＝ホッブズ的、理神論的な性格[47]は、この時代の少なからぬ青年たちを捉えた考え方であった[48]。本事典の翻訳に関わった未来の百科全書派の二人に

とってもまた、それは同じであった。トゥーサンが『習俗論』（一七四八年）で書いた次のような文章も、ジェームズ医学事典「序言」の衒を感じさせずにはおかない。「したがって苦痛への嫌悪と快楽への愛がわれわれのなかに生じさせる情念は道理にかなったものであり、本能に沿ったものである。だがこの本能は自由なものではないし、また啓発されたものでもない、いや啓発される必要もない。と言うのは本能はそれ自身で行動を決めるものではないのだから。本能は悪を避け、善を求める。だが本能は何が悪で何が善かを知らないので、それを本能に示してやる必要がある。本能にかわってこの判別を行うのが理性の仕事である。個々の情念に適切な対象を示し、しかるべき限界のなかに留まらせることによって、情念を制御するのは理性の役割なのである。そして理性はしばしばそれに失敗する。情念を糾弾する叫びが多く聞かれるが、誤ったのは理性なのである」。[49]ディドロはシャフツベリ『美徳と功績に関する試論』翻訳（一七四五年）、『哲学断想』（一七四七年）において、同じ論理を更に徹底して推し進めるであろう。シャフツベリ翻訳に彼は次のように記している。「私たちにとって情愛と同じように自然である正義と不正の感情」は「私たちの生体構造の最初の構成要因のひとつ」であり「不正と公正の区別は私たちには生来のものである」。[50]ジェームズがその事典で掲げたヒポクラテス主義は、少なくともディドロにとっては、ポープ、ハチソン、シャフツベリらと同様、生体の次元に固有の社会結合性の論理を、道徳論・政治社会論の水準に外挿させる論理のひとつだった。それが外挿論理であるほかない以上、後にルソーによって疑似論理ないし短絡として徹底した拒絶を受ける対象となるにしても。[51]

四　学識と経験主義

だが、以上述べたことはあくまでもジェームズの事典の一面に過ぎない。言表の歴史的生産における形式的

側面という観点に立って見るならば、一七四〇年代という時代の中に差し戻した場合、同書の内容と構成が少なからぬ点で顕著な言説論的特徴をもっていたことは注目される。その長大な「序言」（仏訳版では「医学の起源と発展に関する歴史的論説」« Discours historique sur l'origine et les progrèsde la médecine »として訳出）は、きわめて長いタイムスパンを取って叙述された、古代から現在に至る医学の壮大な学説誌（doxographie）の試みであり、現在からみて何が有益であり、何が無益であったかを歴史的に回顧しながら、学問としての医学が、過去からの伝承によって蓄積しえた様々な知識体系の今日的意義を、批判的に明らかにしようとするものであった。そこでは先に触れたヒポクラテスを始め、古代の医家たちから近代の医学者までの伝記（biographie）的叙述も数多く含まれており、彼らの生の様々な事跡、とりわけその生まれや教育、新たな治療法や施術法の発見、他派の学理的な論争、達成した業績が読者の眼に生き生きと映るように活写された。[52] 学問の内部生成を生（bios）と学説（doxa）の緊密な通時的連続のうちに捉えようとするこうしたジェームズの姿勢は、共示的なアルファベット順の体系に基づく辞書項目の内部においてもやはり、古典古代の権威から現在まで伝承されたものの考証への重視として顕れる。仏訳版編者緒言には、例えば以下のようにジェームズ事典の本文構成の特徴が記述される。「自分の意見をただ開陳するばかりで、権威に頼ろうとしないという、学問事典の編纂者（コンピラトゥール）にしばしば見られがちな不都合を、著者は避けた。この不都合はもうひとつの別の不都合、すなわち著者の名望でもってのみ著作に評価が下されるがゆえに、重要な項目でまったく役に立ないという不都合も招く。ジェームズ氏は、他人の意見や施術・実技を正確に引用した。すべての段落の最後には、氏が引例とした著作家の名や著作名が確実に見つけられる」。[53]「すべての段落」はいささか誇張に過ぎようが、ジェームズはイタリック体で、典拠とした古近の学者名やその著書を、時にページ数に至るまで、確かにほとんどすべての項目内に律儀に事細かく記していた。例えば項目« AMINAEUM VINUM »には中途の段落末尾に« *Plyny. Nat. Hist. Lib.* 14. *Cap.*

2 »、項目 « AMBAITINGA » には項目末尾に « *Raii. Hist. plant.* »、項目 « AMBIA » には同じく項目末尾に « *Lemery de Drogues* » とそれぞれあり、項目の内容がプリニウス『博物誌』（一世紀）第一四書第二章、レイ『植物誌』（一六八六年）、レムリ『薬草総合事典』（一六九八年）を典拠とするものであることを示している。重要な項目にそれはより顕著で、冒頭で関連する重要典拠が通覧できるよう遺漏なく枚挙された。植物学項目には、古今の代表的な書籍から渉猟した対応する当該の植物名がラテン語、時にギリシア語で列挙され、それぞれの典拠の記述箇所が巻号、ページ番号とともに一覧されている。疾病学や解剖学項目では、〈観察〉(observation)ないし〈症例〉(case)と称して、関連する様々な疾病を患う患者の臨床記録や屍体解剖の事例が、やはり古今の医書から数多く蒐集され、読者に提示された。先行する言説との連関や連続がこれほどまで明示的に強調されて構造化された例は、同時代の辞書・事典を見てもさほどは多くない。フュルチエール、アカデミーやトレヴーなどの一般的なフランス語国語辞典には、近年アラン・レイらの研究によって具体的に明らかにされつつあるその現実上の絶え間ない相互参照と借用、剽窃を別とすれば、[54] 少なくとも表面的には他の辞書の定義――当然ながらいわゆる「用例」を除くとして――との関連については沈黙されていた。このことはいわゆる技芸部門が中心を占めるチェンバーズ『サイクロピーディア』やハリスの『レキシコン・テクニクム』についてもこれらの辞書と同様である。

近年ポマタおよびシライシらが強調しているように、[55] 西洋近世の〈ヒストリア〉(historia)という概念には、初期ルネサンスの時期から十八世紀にかけて大きな意味上の転換が起こっている。それはこの語が今も担っているいわゆる時系列的な出来事の連続的継起、さらに「人類の過去の記録」という意味（今日で言うところの「歴史」にほぼ近い）のほかに、古典古代以来その命脈を保ってきたきわめて多様な伝統的意味層の近世末期における廃絶と再配置という事態と深く関わっている。特に十七世紀後半以来、主として博物誌や医学の言説の中

で展開した経験主義的〈ヒストリア〉の用法は、時に相互に矛盾する相異なる事象を参照する複合的概念として学問の内部で構築された。すなわち、一方でそれは、人文主義の復興とともに歴史記述におけるいわば常数となった古事学＝学識(érudition)の伝統に属し、先行する過去の文書や記録などのアーカイブを作成し、その蒐集と整理をおこなって、これらを源泉とした体系的・総合的な知の再構築を目指すことをなお意味するものであった。他方でこの語は、特に経験論的医学において、新しい志向をもつ二種類の言説の実践を指す表象ともなった。まず一つは、ハーヴィらが十七世紀前半に行ってそれ以後に流布した解剖学的観察記録が〈ヒストリア〉と呼ばれたことに起因するもので、切開した身体の解剖結果を可能な限り主体が正確に描写し、記述していく言説の実践を指す。二つめは、これもほぼ同時期の十六世紀後半から十七世紀前半にかけて出現した言説形式であり、医師が個々の患者の容態の変化、症状、症例を外面から観察し記録するタイプの文書のことを指す。「診療記録」« curationes »あるいは「観察録」« observationes »として広く公刊されたものである。これも新たな〈ヒストリア〉の一部であった。[56] 身体の表層と深層にそれぞれ医師＝主体の視線が注がれることによって産み出されたこれら二種類の観察記録の様式が一般化されるにつれ、〈ヒストリア〉はもはや過去の権威者による証言の復元というよりはむしろ、自然の個別の事物（＝人体）の描写による知の総合というより近代的な意味を獲得する。確かにそこで、知の保管と分類整理、伝承という古来の〈ヒストリア〉概念の中核的意味が徐々に後退するのは当然である。ダランベールが「『百科全書』序論」において「古代人たちの諸著作から、私たちに有用で有りうるものをすべて抜粋して私たちの手近に置いてくれるためには、彼らはまた有用でないものをもそれから引き出さねばならなかった」[57]と嘲弄することとなるのは、むろん前者の古事学＝学識的実践を指していた。[58]

しかしここでもまた、安直な二分法は禁物である。多くの医学者にとってと同様、ジェームズにとってもま

た、方々の古文書館や資料室、蔵書に集められた数多くの古近の医学文献やその注解書を読むことと、同時代の夥しい数の臨床記録や解屍報告を入手してこれから情報をえることは、おそらくなんら矛盾しないひとつの統一的な実践であった。むしろそうした実践を相互に排他せずに許容したものこそ、この時代に特有な〈ヒストリア〉概念の曖昧さと複雑性であることを、ジェームズの事典の内に読み取るべきである。そのことを端的に示しているのは、ジェームズの医学事典に収録された図版(planches)であろう。ロンドン版事典には、第一巻および第三巻巻末に、本文に対応した形六十三葉の図版が挿入されており、人体全体の骨格や動静脈、筋肉、内臓解剖図、疾病の細部とその治療に用いられる医療機具を始め、内臓や性器など身体の各部位の解剖図や畸形、具体的な手術の描写、子宮内の胎児図、包帯法などが、詳細な銅版画で克明に記されている。しかしこれらの図像の大多数は、ジェームズの指示により作成されたものではなく、他の二次資料からの流用であった。[59] 人体や実験器具の直接的な観察の産物であるはずのこれら視覚的記録資料の大部分が、様々な過去の先行文献の保管と蒐集、選別と分類という人文学的な批評のプロセスを無視しては成立しないという事情は、〈ヒストリア〉概念の歴史性を端的に示すものである。透明な主体が視覚を通じて裸の世界と対峙するという経験主義的な観察プロセスの構築過程には、文献批判と注釈から構成される古事学的＝文献学的な媒介とネットワークがなお厳然としてそびえていた。かつてルネ・パンタールは、十七世紀前期のガブリエル・ノーデやギー・パタン、ラモット・ル・ヴェイエらに示されるように、人文主義的素養に深く沈潜し、歴史批評や文献学、実験科学などの実践を通じて、キリスト教的・神学的ドグマに批判意識をもって対抗的な自律的言説を構築した文人たちの知的思潮を「学識ある自由思想家(リベルタン)」と読んだが、[60] ポマタ／シライシがそれを転用して使った卓抜な比喩を借りれば、[61] ここでジェームズが体現しているものも「学識ある経験主義者(アンピリスト)」のそれなのである。

右の研究は文科省科研費基盤C平成二一―二三年度「『百科全書』ディドロ執筆項目本文研究：その「生命学」的展開」（代表・逸見龍生）、および平成二三年度新潟大学人文学部研究推進費による助成を受けて行われた。ここに記して謝辞とする。

註

(1)Robert James, *Dictionnaire universel de médecine, de chirurgie, de chymie, de botanique, d'anatomie, de pharmachie, d'histoire naturelle & c. Procédé d'un Discours Historique sur l'origne & les progrès de la Médecine. Traduit de l'anglais de M. James, par Mrs Diderot, Eidous & Toussaint. Revu, corrigé & augmenté par M. Julien Busson, Docteur-Régent de la Faculté de Medecine de Paris*. 6 vols, Paris, Briasson, David l'aîné et Durand, 1745-1748. 原著はRobert James, *The medicinal dictionary, Including Physic, Surgery, Anatomy, Chymistry, and Botany, Together with a History of Drugs*, 3 vols, London, T. Osborne, 1743-1745.

(2)ロバート・ジェームズは一七〇五年、イングランド中部のスタフォードシャー州で生まれた。リッチフィールドのグラマースクールに入学、同窓のサミュエル・ジョンソンと生涯の親交を結ぶ。オックスフォード大学で人文学を学び、同大学で医学を修めた後、一七二八年五月八日ケンブリッジ大学で博士号を取得。同年一月十二日には、ロンドン医師協会に資格外会員として登録を済ませていた。一七四三年から刊行した『医学事典』で注目を集める。同年には、今日のアスピリンのような用途で用いられた高名な解熱剤「ジェームズ・パウダー」をロンドンで商品化し、商業的な成功も収めた。一七四五年にロンドン医師協会資格会員に昇格。その後、『物理の実際』（一七四六年）『狂犬病について』（一七六〇年）、『医務室論』（一七六四年）、ベルナルディーノ・ラマッティーニ『職人の病気』の翻訳もあり（一七四六年）、その冒頭にフリードリッヒ・ホフマンの風土病論も自身の手で訳出している。一七七六年三月に死亡。没後『熱について』（一七七八年）、『熱パウダーに関する弁明』（同）、『子どもの病気について

の小論』（同）が刊行される。

（3）『ジェントルマンズ・マガジン』一七四二年一二月号に同巻の項目ANTIMONYからの抜粋が見つかる。"The medicinal Nature of Antimony", *The Gentleman's magazine*, 1742, vol 12, p.636.

（4）*The Gentleman's magazine*, 1744, vol. 14, p.716. Printed by T. Baskett and by the assigns of R. Baskett, for T. Longman and T. Shewell, 1745.

（5）*Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société des gens de lettres*, 17 vols, Paris, Libraires associés, 1751-1765. 本稿では同書の慶応義塾大学メディアセンター所蔵パリ・オリジナル版を利用した。なお、同版の真正性については、Richard N. Schwab, with the collaboration of Walter E. Rex, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, 6 vols, « Studies on Voltaire and the eighteenth century (80, 83, 85, 91-93)», Oxford, The Voltaire Foundation, 1971-72. を基に調査した以下の論文を参照。逸見龍生「『百科全書』を読む――本文研究の概観と展望」『欧米の言語・文化・社会』（新潟大学人文学部「ヨーロッパの基層文化と近代」プロジェクト）第一一号、二〇〇五年、三九―九二ページ。ディドロ執筆項目のうち批評校訂版『ディドロ全集』所収のものは同校訂版も同様に参照した。Denis Diderot, *Oeuvres complètes*, édition critique sous la direction de Herbert Dieckmann, Jacques Proust, Jean Varloot, Paris, Hermann, 1975-. [DPV].『百科全書』とチェンバーズ『サイクロピーディア』および『トレヴー辞典』との関係については以下を参照。Marie Leca-Tsiomis, *Ecrire l'Encyclopédie. Diderot : de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, « Studies on Voltaire and the Eighteenth Century », Vol. 375, Oxford, Voltaire Foundation, 1999. ; Alain Cernuschi, *Penser la musique dans l'Encyclopédie*, Honoré Champion, 2000. 本文をめぐるこの問題についての概略はすでに逸見龍生「『百科全書』を読む――本文研究の概観と展望」（前掲論文）で取り上げた。なお、実際の本文批評の試みとしては、以下のものがある。逸見龍生「百科全書」第一巻ディドロ寄稿項目における「王立科学アカデミー概要および論文集」典拠」、『新潟大学人文科学研究』、一九九六年、四九―七〇ページ。逸見龍生「ディドロ執筆項目「『霊魂』補遺」――『百科全書』本文校訂の試み」『藝文研究』第九一号（慶應義塾大学文学部紀要）、二〇〇六年、四五―六〇ページ。Tatsuo Hemmi, «Pluralité des voix dans l'*Encyclopédie* », dans *Voix et Modernités. Acte du colloque international du 15 -16 mars 2010 (Université de Bordeaux III)*, Niigata, Faculté des Sciences Humaines de

l'Université de Niigata, 2011, pp. 92-108.

(6)「辞書の世紀」として様々な十八世紀における辞書・事典的ネットワークの歴史的文脈を捉えるには、Leca-Tsiomis の前掲書のほか、Bernard Quemada, *Les Dictionnaires du français moderne 1539-1863. Etude sur leur histoire, leurs types et leurs méthodes*, Paris, Didier, 1967; Pierre Rétat, «L'âge des dictionnaires », dans Henri-Jean Martin, et Roger Chartier, éd. *Histoire de l'édition française*, tome II : *Le livre triomphant. 1660-1830*, Fayard, 1990, pp. 232-241. および Alain Rey, *Miroirs du monde. une histoire de l'encyclopédisme*, Paris, Fayard, 2007. を参照。

(7)Louis-Philippe May, «Histoire et sources de l'*Encyclopédie* d'après le registre des délibérations et de comptes des éditieurs etunmémoire inédit », *Revue de synthèse*, 1938, février, no. XV, 1938, p.32.

(8)りの点について詳しくは以下の論文を参照。Frank A.Kafker, Jeff Loveland, «Antoine-Claude Briasson et l'*Encyclopédie* », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 35, 2003, pp. 131-142.

(9)cf. «Projet de Souscription pour un *Dictionnaire Universel de Medecine, de Physique, de Chimie, de Botanique, de Chirurgie, d'Anatomie, de Pharmacie. & c.* en Six Volumes in-fol. avec figures, traduit de l'Anglais de M. James, Docteur en Médecine. Cet Ouvragi s'imprime à Paris, chez Briasson, à la Science; David, à la Plume d'or ; Durand, à S. Landry, & au Grisson.», *Journal des Savants pour mars 1745*, Paris, pp. 174-177.

(10)Denis Diderot, *Correspondance*[*CR*], recueillie, établie et annotée par Georges Roth et Jean Varloot , 16 vols, Paris, Les Editions de Minuit, t.1, 1955, p. 86.

(11)Franco Venturi, *Jeunesse de Diderot*, Genève, Slatkine, 1967, pp. 47-48.

(12)Wilson, *op.cit.*, pp. 65 et suiv.

(13)*CR*, p. 55.

(14)ibid.

(15)Franco Venturi, *Le origini dell'Enciclopedia*, « Piccola biblioteca Einaudi : 26 », Einaudi, 1977.（フランコ・ヴェントゥーリ『百科全書の起源』大津真作訳、法政大学出版局、一九七九年）;Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie, op.cit.* ; Arthur W.Wilson, Diderot. *Sa vie et son oeuvre.*, traduit de l'anglais par Gilles Chahine, Annette Lorenceau, Anne Villeaur,

«Bouquins », Paris, Laffont/Ramsay, 1985.

(16)世界に残存する同資料オリジナルは二部のみであり、そのうちの一部は慶應義塾大学メディアセンターに所蔵されている。現在デジタル化による公開を準備中である。

(17)May, *op. cit.*, p.15.

(18)May, *op. cit.*, p.16.

(19)本稿註12参照。

(20)Pierre-Josephe-François Luneau de Boisjermain, *Mémoire pour Pierre-Josephe-François LUNEAU DE BOISJERMAIN, souscripteur de l'Encyclopédie, dans lequel il démontre que, sur les 737 livres qu'il a payées pour la souscription*... Paris, 1771.« pièces justifficatives », p.14. 本資料は『百科全書』刊行史を考える上で一級の一次資料のひとつであり、本文も重要だが、特に証拠資料（pièces Justificatives）はきわめて重要である。便宜のため、内訳を以下に記す。Table des Pièces Justificatives. Arrêt du Conseil d'Etat, portant réglement sur le fait de la Librairie. (3)Autre, concernant l'impression & le débit de l'Almanach-Royal. (5) Privilége de l'Encyclopédie de Chambers, du 26 Mars 1745. (6)Sommaire pour le sieur Jean Mills, Gentillhomme Anglois. (8) Arrêt du Conseil d'état, au sujet du Privilége accordé pour Dictionnaire des Arts & des Sciences, de Chambers, du 28 Août 1745(9)Encylopédie, ou Dictionnaire universel des Arts & des Sciences, traduit de l'Anglois, de Mills (11) Premier & second Priviléges de l'Encyclopédie de MM. Diderot & d'Alembert, du 8 Février 1748 (12)Arrêt du Conseil d'état, qui ordonne que les deux premiers volumes de l'Encyclopédie demeureront supprimés, (16)Autre, qui révoque les Lettres de Privilége obtenues pour cet Ouvrage(17)Autre, qui ordonne aux Librairies y dénommés, de rendre la somme de soixante-douze liv. à ceux qiu ont souscrit pour l'Encyclopédie (18) Privilége d'un Recuil de mille planches, (19)Avis aux Souscripteurs de l'Encyclopédie, 1757 (20)Autre avis, à l'occasion de la premiere livraison des planches. (21) Autre avis, à l'occasion de la seconde livraison des planches. (23) Autre avis, à l'occasion de la troisiéme livraison des planches. (25) Autre avis, à l'occasion de la quatriéme livraison des planches. (26)Autre avis, à l'occasion de la cinquiéme livraison des planches. (27) Autre avis, à l'occasion de la sixiéme livraison des planches. (29) Copie des Lettres qui m'ont été écrites au sujet du tableau de l'Encyclopédie (30) Preuves que les Librairies associés n'ont pas exigé l'augmentation

de 20 liv. sur les dix derniers volumes, des personnes seules qui ont souscrit depuis le premier Juillet 1751. (32) Dénonciation d'un plagiat, faite à M. Fréron, par M. ***, qui devoit être chargé de travailler aux dessinsdes planches de l'Encyclopédie. (34)Autre Lettre de M.*** à M. Fréron, au sujet de la précédente dénonciation. (38) Extrait des Registres de l'Académie Royale des Sciences, concernant les planches de l'Encyclopédie. (39)Nouvelle édition du Dictionnaire encyclopédique, dixsept volumes in-folio, dediscours, sept de planches, proposée par souscription. (42)Suppléments à ce Dictionnaire, proposés par souscription (44) Copie de Souscription de la seconde édition de l'Art de vérifier les dates, (45)Autre copie de la même sousucriptin, pour le même ouvrage, (46)Devis général des frais de l'Almanach-Royal.(47) Produit dudit Ourvarge (48).

(21)Cf. François Moureau, «L'*Encyclopédie* d'après les correspondants de Formey», *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 3, 1987. p.131.

(22)*Journal des Savans pour l'année 1745*, Paris, *op.cit.*

(23)*ibid.*, pp.185-187.

(24)*Prospectus pour l'Encyclopédie ou Dictionnaire universel des Arts et des Sciences, traduit de l'anglois d'Ephraim Chambers*, Paris, Le Breton, 1745, pp.[3-4]. なお、引用にあたっては早稲田大学大学院鈴木理史氏による翻訳に従った。

(25)« ABACTUS », « ACETABULUM », « ACETUM », Robert James, *The Medicinal Dictionary, op.cit.*, t. I.

(26)本稿註1を参照。

(27)«Avertissement de l'éditeur », James, *Dictionnaire universel de médecine*, *op.cit.*, pp.[5-14].

(28)*op.cit.*, p.[5].

(29)Jacques Roger, « Dictionnaire universel de médecine, traduit de l'anglais de Robert James. Etude par Jacques Roger », dans *DPV*, 1975, p.158, note 21.

(30)例えば、後に見るようにロンドン版冒頭「序言」には、旧約聖書『創世記』からの引用が冒頭で数度にわたって繰り返され、ジェームズによる医学の歴史叙述全体を根本で規定している説話的枠組みのひとつとなっている。cf, James, « Preface », The medicinal dictionary, *op.cit.*, p.i, p.ii. 項目 « CAESAREA SECTIO » におけるカトリック僧侶批判

については、cf, Roger, *ibid*.

(31) James, « Preface », *The medicinal dictionary, op. cit.*, pp.i-xcix.

(32) *ibid*., p.i.

(33) *ibidem*.

(34) James, *ibid*., p.xi. シデナムを経由したヒポクラテス主義の英国医学における再興については、Lester S. King, *The philosophy of medecine. The early eighteenth century*, Cambridge, Massachusetts and London, Haravard University Press, 1978, pp. 241 et suiv. ; François Duchesneau, *La Physiologie des Lumières, Empirisme, Modèles et Théories*, « Archives internationales d'histoire des idées », The Haye, Boston, London, M. Nijhoff, 1982, pp.27 et suiv.; および川喜田愛郎『近代医学の史的起源　上』（岩波書店、1977年）第一四章第一節「近代医学の模索　臨床医学の再出発――シデナムとウィリス、諸分科瞥見」三二〇ページ以下を参照のこと。

(35) James, *The medicinal dictionary, op.cit.*, p.xi.

(36) この概念についてはメニュレによる『百科全書』同項目、およびRoselyne Rey, *Naissance et développement du vitalisme en France, de la deuxième moitié du 18e siècle à la fin du Première Empire*, Préface par François Duchesneau, Oxford, Voltaire Foundation, 2000, p.123 以下を参照。但し、ジェームズ医学総合事典にこの表現が見られないというレイの指摘は、本論に示すように明らかに誤りである。

(37) James, *ibid*.

(38) 一八世紀英国医学における物質観については、King, Duchesneau の前掲書を参照。また長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙 ―不完全な機械の喩』名古屋大学出版会、2001年、特に第7章「永久機関と力――初期ニュートン主義への挑戦――」第三節「一八世紀化学革命の物質観」二六五ページ以下を参照。

(39) cf. Roger, op.cit, p.160.

(40) cf. Duchesneau, *op.cit.*, chapitre 8, « Monades, molécules organiques et ordre physiologique : de Maupertuis et Buffon à Haller», pp.235 et suiv. ディドロとの関係において特にJacques Roger, *Les Sciences de la vie dans la pensée française du XVIIIe siècle:La génération des animaux de Descartes à l'Encyclopédie*, 1963ed, «L'Evolution de l'humanité», Paris, Albin

Michel, 1993, pp. 457 et suiv.

(41)Daniel Le Clerc, *Histoire de la Médecine, où l'on voit l'Origine & les progrès de cet Art, de Siècle en Siècle; les Sectes, qui s'y sont formées; les noms des Médecins, leurs découvertes, leur opinions, & les circonstances les plus remarquables de leur vie. Nouvelle édition, revue, corigée, & augmentée par l'Auteur en divers endroits, & sur tout d'un Plan pour servir à Continuation de cette Histoire depuis la fin du Siècle II. jusques au milieu du XVII.*, Amsterdam, Aux Depens de la Compagnie, 1723, pp.115-116. 仏訳版では、ルクレールの原文のフランス語がほぼそのまま復元されており、仏訳者がルクレールの原著を実際に参照していることがわかる。ダニエル・ルクレールは、ジャン・ルクレールの五歳上の実兄である。

(42)仏訳版に対する同誌の批評を参照せよ。*Bibliotheque raisonnée des ouvrages des savans de l'Europe*, de janvier, février & mars, 1751. pp. III et suiv.

(43)cf.«Observations sur la traduction de « AN ESSAY ON MAN » de Pope par Silhouette », Introduction et commentaire par Alain Seznec. Texte établi par Alain Seznec et Jean Varloot, dans *DPV*, I, p. 167.

(44)*ibid*., p.233.

(45)*ibid*., p.232.

(46)*ibidem*.

(47)ポープの『人間論』の思想史的射程と同時代におけるその受容については多くの議論がある。この問題に関する最近のまとまった議論としては、以下を参照。Alessandro Zanconato, *La dispute du fatalisme en France : 1730-1760*, Paris, Presses Paris Sorbonne, 2004.

(48)ジャン・エラールは、ポープに続いて、美学的文脈におけるアンドレ師『美学に関する試論』（一七四一年）およびハチソンの『美と徳のわれわれの観念の原型』（一七二五年、仏訳は一七四九年）の感覚論的生得主義、ジュネーブの自然法学者ビュルラマキの『自然法の諸原理』（一七四七年）における「道徳的本能」の概念など、四〇年代の様々な言説におけるこうした傾向の集中的な顕れを、三〇年代から四〇年代にかけてのフランスの「自然」概念の急激な変貌と結びつけて指摘している。cf. Jean Ehrard, *L'idée de nature en France dans la première moitié du XVIIIe*

siècle, 1963, S.E.V.P.E.N ed, Paris, Albin Michel, 1994, pp.371-372.

(49) François-Vincent Toussain, *Les Moeurs*, [n.l.], 1748, pp. 39-41（フランソワ＝ヴァンサン・トゥサン『習俗論』立川孝一・渡部望訳『一八世紀叢書２―習俗』、国書刊行会、二〇〇一年、一七七―一七八ページ）。

(50) DPV, t. I., p.335.

(51) cf. Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, *op.cit.*, p.369.

(52) こうしたジェームズの「序言」の言説構造の原型は、古代医学における「学説誌」の系譜のうちに見出すことができるように思われる。この問題については以下を参照 cf. Philip J.van der Eijk (ed.), *Ancient Histories of MedicineEssays in Medical Doxography and Historiography in Classical Antiquity*, Brill Academic Pub, 1999. 特にその第一章 Philip J. van der Eijk, « Historical Awareness, Historiography and Doxography Greek and Roman Medicine », pp.1-30.

(53) James, *Dictionnaire universel*, *op. cit.*, p.[10].

(54) cf. Alain Rey, *Miroirs du monde. une histoire de l'encyclopédisme*, op.cit; Alain Rey, « Antoine Furetière imagier de la culture classique », introduction au *Dictionnaire universel d'Antoine Furetière*, Paris, 1978, p.5-95; Bernard Quemada, *Les Dictionnaires du français moderne (1539-1863), étude sur leur histoire, leurs types et leurs méthodes*, Paris Bruxelles-Montréal, Didier, 1967.

(55) cf. Gianna Pomata and Nancy G.Siraisi (eds), *Historia :Empiricism and Erudition in Early Modern Europe*, Cambridge, MA / London : The MIT Press, 2005.

(56) cf. Gianna Pomata, « Observations Rising :Birth of an Epistemic Genre, 1500-1650 », Lorraine Daston et Elizabeth Lunbeck, ed. *Histories of Scientific Observation*, University of Chicago Press, Chicago, 2011, pp. 54 et suiv.

(57) Jean Le Rond D'Alembert, *Discours préliminaire des éditeurs de 1751 et articles de l'Encyclopédie introduits par la querelle avec le Journal de Trévoux*, édité par Martine Groult, Honoré Champion, 1999, p.113. 邦訳、岩波文庫『百科全書』、八八ページ。

(58) この点については、Arnaldo Momigliano, *Problèmes d'historiographie ancienne et moderne*. Paris, Galli-mard, 1983., 特に « L'histoire ancienne et l'antiquaire », pp. 244-293（1re édition 1950）を参照。また、J.G.A. Pocock, *Barbarism and*

Religion, volume 1:The Enlightenments of Edward Gibbon, Cambridge, Cambridge University Press, 1999, ダランベールについて特に同書の第八章を参照。«D'Alembert's 'Discours preliminaire': the philosophe perception of history», pp.169-207. また歴史記述の問題の十七世紀後半から十八世紀前半にかけての歴史的受容と展開については、野沢協『ピエール・ベール著作集』、第三巻「歴史批評辞典」解説「三　ピエールベールの歴史批評（1）――誤謬の起源、誤謬の類型」（法政大学出版局、一九八二年）、一一一七ページ以下、Blandine Kriegel, *L'histoire à l'Age classique* 2. *La Défaite de l'érudition*, « Quadrige », Paris, PUF, 1996[1988]. そして Chantal Grell, *L'histoire entre érudition et philosophie:étude sur la connaissance historique à l'âge des Lumieres*, « Questions », Paris, Presses universitaires de France, 1996. を参照されたい。

(59) cf.Roger, « Dictionnaire universel de médecine », *op.cit.*, p.156, note 12.

(60) cf. René Pintard, *Le Libertinage érudit dans la première moitié du XVIIe siècle. Nouvelle édition augmentée d'un avant-propos et de notes et réflexion sur les problèmes de l'histoire du libertinage*, 1943 ed, Genève-Paris, Slatkine, 1983. なおリの点については、Olivier Bloch, «Matérialisme et clandestinité : tradition, écriture, lecture », dans préface de Didier Gil, éd. *Matière à Histoire*, Paris, Vrin, 1997, pp. 272-286. における、「学識、伝統、書物のマテリアリズム」の概念もまた重要である。ブロックは十八世紀初期から世紀を通じて流通した「地下文書」の世界にあった匿名的なテクストの相互的生産と受容のような実践が、この時代の思想史的パラダイムのうちで持っていた積極的意義を繰り返し強調している。

(61) Gianna Pomata and Nancy G. Siraisi (eds), *Historia*, *op.cit.*, p.17.